

「老い」と西洋思想⁽¹⁾

山田弘明

はじめに

「老い」ということで、いつも思い出す風景がある。今から三十年前、フランスに滞在していた時のことである。冬の日のリヨンはとりわけ寒さが厳しい。凍るようなローヌ河畔を、授業を終えた女子学生たちが、色鮮やかなミニスカートとセーター姿で、足取りも軽くカツカツと歩く。みんな生き生きとして、小鳥のようにおしゃべりをしている。吐く息が白い。それとは対象的に、河沿いの公園で老人たちが、厚手のコートとスカ―フで完全武装して日向ぼっこをしている。白く濁った目をして、爬虫類のように黙ってじっと動かない。ある老婦人が、やつと動いたと思ったら、おぼつかない足取りで三步ほど歩いては立ちどまり、呼吸を整えるありさまであった。そんな情景を見て、あの若い女性たちもいずれは老いて、みんなこうなるのかと感慨を深くした。そのとき耳の奥で日本の歌が響いたような気がした。「いのち短し、恋せよ少女^{おとめ}」。

ところで、周知のように生命倫理学には「生命の質」QOL (Quality of Life) という考え方がある。死に赴く者が最後の日々を人間らしく生きることが大切だというもので、文脈によつて二つのニュアンスがある。

第一に、医療現場で末期がんの患者や植物状態の患者がいる場合、かれらはもはや(生命の質が高くはない

「人間らしい生き方ができない」ので、無理な延命治療などをすると、かえってその人格をおかすことになる、という文脈である。これに対しては、「生命の神聖さ」SOUL (Sanctity of Life)、つまり人間の生命はすべてどんな場合でも尊いものであり、人の手で勝手に生命を短くすることは許されないと、という立場からの反論がある。

第二に、ホスピスの用語として、患者に残された最後の人生を、静かに人間らしく充実して送ってもらうように、そして肉体的にも精神的にも有意義に過ごせるように、きめ細かくケアする、という文脈である。

本稿では第二のニュアンスに着目したい。人生最後の日々を、生の価値を高めて大切に生きるという意味での「生命の質」である。この考え方を手がかりにして、QOLを高めるという角度から「老い」というものを考えたい。私は西洋哲学を専門にするものなので、昔から西洋の偉人たちは「老い」ということをどう考え、どう対処してきたか。これをお話したい。その例として古代のキケロ、近世のデカルト、現代のボーヴォワールの三人の思想家をとりあげる。むろん当時はいまの日本のような「高齢社会」ではなかったが、老いに対してそれなりの対処や、こころの準備をし、社会的な提言をしている。そこから現代人はどういうことを学び取れるかを見たい。

一、キケロ

もとより西洋古代は高齢社会ではなかった。有名人の死亡年齢を調べてみると、アレクサンドロス大王三三才、エジプトのクレオパトラ三九才（自害）、カエサル五六才（暗殺）。アリストテレス六二才、ソクラテス七

一才(自害)、プラトン八一才。なかにはインクラテス九八才や、ゴルギアス百八才のような人もいたが、それは例外である。一般庶民も入れると、乳児の死亡率が高いので、平均年齢は十八才くらいと言われている。すさまじい低齢社会である。だが人々はそれなりの老人対策をしていた。そのための社会制度もあつたであろうが、思想家たちは個人のレベルで「老い」に対していろいろな心構えをしており、それが記録に残されている。その代表はキケロであろう。(キケロは紀元前一世紀、古代ローマの政治家にして哲学者であり、ラテン語の文豪でもあつた。カエサルをはじめとするローマの政治をつぶさにみてきたが、政敵アントニウスの命によって六三才で殺害された。)

キケロ『老年について』(中務哲郎訳、岩波文庫)は、八四才になるローマの大政治家カトーが、二人の若者に老年について語るといふ設定である。キケロによれば、老年が惨めとされる理由に四つある。

- (1) 公の仕事から引き離される(引退)
 - (2) 肉体が衰える(からだの衰弱)
 - (3) すべての快楽を奪い去られる(欲求の低下)
 - (4) 死から遠く離れていない(死の接近)
- そのいずれも正当でないとして、退けられる。

(1) 公の仕事から引き離されるという点については、老人には肉体の力とか機敏さこそないが、深い思慮や見識でもって大事業をなすとげられる。記憶力が衰えるのはその鍛錬を怠った人にかざられる。若者と交流するなど、常に何かを行うことが大切である。

(2) 肉体が衰えることは否めないが、公の仕事や勉強には体力はさほど要しない。何ごとも体力に依じて

行うのがよく、老人には静かで気負いのない話しぶりふさわしい。健康に配慮し節制に努め、肉体だけでなく精神をいっそういたわること。肉体は老いるがこころは老いない。(キケロ自身は胃が弱かったが、養生と鍛錬に努め、毎日の散歩や摩擦を欠かさなかつたという。)

(3) 快樂がなくなるといふのは俗説である。肉体の快樂はあまりよいものではなく、快樂は精神の目隠しをする。老年においてはむしろ青年時代の悪徳が取り去られる。たとえば、宴会の馬鹿騒ぎとは無縁になり、友人と節度ある酒席を楽しむことができる。「肉欲や野望などのあらゆる欲望への服役期間が満了し心が自足する。心が自分自身とともに生きるのはなんと価値あることか。研究や学問という糧のようなものがいくらかでもあれば、暇のある老年ほどよろこばしいものはない」。ソロンの言うように「毎日何かを学び加えつつ老いてゆくのだ」。心の快樂にもまして大きな快樂はないし、農耕の楽しさもある。他人から尊敬を受けることの楽しさ。これも老年ならではのものである。

(4) 死の接近と言うが、青年も老年と同じくらい死に接近している。「成熟こそがよろこばしい。死に近づけば近づくほど、陸地を認めて、長い航海の果てに港に入ろうとするかのように思われる」。また、老年には期限がないので死を軽んじることができる。老年の方が青年よりも気概に満ち、毅然としている。「死をなにもともせぬよう、若いときから練習しておかねばならない」。³⁾

キケロは、このように老年に予想されるマイナス面のすべてを論駁し、逆に老年こそ素晴らしいのだ、と老年のよさをこぞとばかり数え挙げている。老年の心身が青年に比べて安定して充実していることを指摘している。老年であればこそ人生の価値を高めて大切に生きるということ、QOLを高めることの大切さを教えている。これは、老年の一面の真実を言い当てており、定年退職してなお元氣な日本の熟年世代にも通じるであ

ろう。しかし無理して老年を美化している面もある。このときキケロは六一才、死の二年前で、政界引退、弟子の離反、離婚、再婚、娘の死などで、けつして老年の幸福を味わっていないかった。キケロも本当は現役バリバリでいたい（元老院に復帰したかった）、死ぬのはいやだ（刺客におびえていた）、本当は青春を取り戻したい（六十才のとき十五才の少女ブリリアと再婚）と思っていたのではないか。しかもキケロの場合、裕福で健康な貴族のみが考察の対象であり、病いをもった老人や貧しい庶民はどうなのか、もっぱら男性の観点からのみで、女性の老年はどうなのか、という疑問もあるだろう。

一、デカルト

デカルトはフランス十七世紀の哲学者である。この時代の有名人の死亡年齢を見るに、パスカル三九才、スピノザ四五才、モリエール五一才、F・ベーコン六五才、レイ十四世七七才、ガリレイ七八才、ニュートン八五才、ホップズ九一才である。平均年齢は二十〜二五才であったという。デカルトは五四才で思いもかけず死んでしまったので、キケロのように「老い」についてのまとまった著作は残していない。だが五一才のとき、まだそう老いを感じていないので、これから哲学の大家がかりな勉強をする『哲学原理』序文⁴と言いい、人間が百才以上の寿命を得るのも可能（ホイヘンス宛書簡）、と言っている。そして健康の維持と長寿についての考えを表明している。そこにデカルトのQOLを高めるといふ思想を読み取ることができる。

(1) まず健康の維持ということである⁴。いかに健康を保つか、いかに養生するか、これは現代のいわゆるヘルス・ケアの問題でもある。デカルトは『方法序説』のなかで、「健康が第一の善であり、この世のあら

ゆる善の基礎である」と述べている。のちには「健康の維持はつねに私の研究の主要目的だった」（ニューキャッスル宛書簡）とも述懐している。問題は、健康を維持するにはどうすればよいか、養生の中身である。医学は人間の身体の仕組みを教え、身体の何たるかを教える。精神は身体とは原理的に違うものなので、身体のメカニズムをよりよく知れば、精神は自分の身体を制御することが可能になる。この意味で人間は、自らの「自然の主人にして所有者」（『方法序説』）となりえ、これによって心身の健康はよく維持される、と考える。からだのことをよく知り、ところがそれを適切に制御すればよい、ということである。もっともな説だが、どうやってそれが可能なのか。

その具体例として、弟子エリザベトとの間に交わした手紙を見よう。この女性はハイデルベルクの王女で当時二四才であった。病気がちであったので、そこには健康や医療の問題が多く含まれている。その一つの例は温泉療法である。血液循環が悪く憂鬱症のエリザベトは、医者からベルギーはスパの鉱泉の飲用をすすめられ、その効能についてデカルトに意見を求めた。かれはその成分を分析して、蒸留液、硝酸、硫酸などを含むので適切であるとの分析結果を出しているが、アドバイスはそれだけにとどまらない。鉱泉をただ飲用するだけではなく、同時に、「精神をあらゆる悲しい考えや、学問についてのあらゆる真剣な思索からさえもまったく解放しなければなりません。そして森の緑、花の色、鳥の飛翔など、どんな注意も要しないことながらを眺めるようにしなければなりません」（エリザベト宛書簡）としている。身体面の治療と同時に、情緒を解放して気持ちを楽しめるようにするなど、心理面のケア（メンタル・ケア）が重要であることを教えている。

他の例は怒りや悲しみなどの情念の処理である。これも精神と身体との密接な関係が基礎になっている。情念を統御し、自らの力によって精神の満足を得ることが必要だと説く。たとえば不幸な出来事に対しては、あ

たかも舞台上で悲劇の上演を見るかのようにそれを突き放して見るようにすれば、悲しみからさえも満足を得るであろう。精神は情念に動かされはするが身体とは別のものであり、情念は身体レベルのことであるから、身体のみがメカニズムを知らば、容易に精神によって統御できる。要するに、人間身体は何たるかを医学的に知り、それを精神の力で自由にすることが大切だとするのである。健康の維持について身体のみではなく、精神との相関関係を見ることの重要性を言っている。これによって健康の維持が可能になるとするのである。デカルトはエリザベト三二才のときに死んでしまうが、彼女はその教えを守って六二才まで、北ドイツの修道院長として生きた。

(2) 次に長寿である。この養生の考え方が長寿を得ることとつながる。病気の予防や治療とならんで、老衰を遅らせるということも医学の役割の一つであった。デカルトは、医学によって老衰の原因を知れば、自然に長生きをすることができ、そのためにはわれわれの生活習慣を改めればよい(ホイヘンス宛書簡)という。それはどういうことか。ものごとを快適に見える角度から眺め、満足は自分の心にもあると知ること、精神にあまり緊張を強いずに自然を愛でる生活に切りかえること、勉強以外の時間をすべて精神の休息に充て、自然の導くがままに生きること(エリザベト宛書簡)、がそれである。人には自然本来の回復力が備わっており、病気になるっても薬などに頼らず、ある程度自然にまかせるのがよい。これが医学の基本であり、養生の秘策である。このことを知れば、人はおのずから自分自身の医者になれるはずである、とデカルトは言う。ローマ皇帝ティベリウスが、三十才以降、医者の助けや忠告を求めず、自分の判断で健康を管理していたことに習い、何が害になり何が益になるかは自分が一番よく知っているのであるから、外なる医者よりも内なる自分の自然にしたがって自らの判断で養生するのがよい(ニューキヤッスル宛書簡)、としている。かくして自分自身が自分の最良

の医者になることになる。このようにして、老衰を免れ、長寿を得ることができると考えている。

だがそれだけではない。デカルトは、長寿の問題を道徳にスライドさせている。「私の道徳の要点の一つは、死を恐れずに生を愛することです」(メルセンヌ宛書簡)と言っている。死を恐れて老衰を遅らせようとあくせくするよりも、むしろ人生を楽しむことに自分の意識を向けかえるのである。長寿を得るための特效薬はないが、もしあるとするなら、それは医学よりもむしろ「死を恐れない」、「生を愛する」という道徳に求められることになる。死を忘れて人生に情熱をそそぐこと、これもメンタル・ケアに相当する発想であろう。

デカルトの考えをどう評価するか。エリザベトは猛反対であった。自分で自分の身体に責任をもつというのはよいとしても、精神によつて身体を制御できるものなのか。現実はそのなりに簡単ではない。この人生を愛することが本当にできるのか、それができないから相談している。女として生きることが大変なのを理解していない、などと反発している。しかしデカルトは、心身の相互関係を知ること、自らの医者になること、人生に情熱を注ぐことなど、自分の手でQOLを高めて生きることの尊さを教えていることになろう。

三、ボーヴォワール

二十世紀の思想家には長命な人が多い。メルロ・ポンティ五三才、ウイトゲンシュタイン六二才は若すぎる。サルトル七五才、西田幾多郎七五才、ハイデガー八七才、クワイン九二才、ポッパ九二才、ラッセル九八才、ガダマー百二才。ボーヴォワール自身は七八まで生きた。彼女は二十世紀フランスの実存主義の文人である。『第二の性』で有名だが、「老い」の問題についても鋭いメスを入れている(『朝吹三吉訳、人文書院』)。

これを書いたのは一九七〇年、著者六三才のときであった。

日本人から見て興味深いのは、姥捨て伝説として深沢七郎の『檀山節考』が紹介され、老人の性を描いた谷崎潤一郎の『鍵』や『瘋癲老人日記』が出てくること、また日本女性の生き方が紹介されていることであろう。すなわち、日本の女性にとつて晩年は解放と感ぜられ、夫、子供への献身から離れて自分自身に帰る例として、「日本の上・中流階級の婦人は、しばしば若やいだ老いを享受する。残された最後の幾年かを自由にすごすため、七十才で離婚して幸福に暮らす婦人の例を私はいくつか聞いた」としている。

『古い』は日本語にして千ページを超える渾身の大作である。古いについての生物学的・文明論的・社会学的・哲学的分析がなされ、老人の置かれた不当に悲惨な状況を告発するというのが、全編を貫くテーマである。

前半は、生物学、文化人類学、歴史・文学、社会学など、「外からの視点」で、老いを分析している。すなわち、老衰を科学的に研究する老年学の価値は高いが、老いは生物学的事実であるだけでなく文化的事実であり、老化現象は社会的な状況との関係においてある、とする。そして未開社会における老いを考察して、未開社会は必ずしも老人を冷遇しない。ある社会は老人をどう扱うかによつて、その社会の原理と目的の真実の姿を赤裸々に露呈する、とする。次いで、老人の置かれた境遇や評価をめぐって、古代から現代までの西欧社会を歴史的・文献的に通覧する。その結果、老人は惨めなものとして描かれる場合が多いと指摘する⁵⁵。最後に現代社会の場合を取り上げ、年金、住宅問題、救済院（ホスピス）などの調査をもとに、老人の人間性を損なうような社会制度の劣悪さを強調する。たとえば定年退職と核家族とが老人を孤独、無益、陰惨にしていることはたしかだが、それは社会制度がそうさせているのであり、社会のシステム全体を断罪すべき、とする。

後半は「内からの視点」で、古いという状況を内面的に把握する。老いは不意打ちであり、だれしも自分の

老いをなかなか受容できない。たとえば、老人になっても性愛から浄化されることはなく、嫉妬もあり、夫婦生活は困難である。年を経るにしたがって過去は重くなり、未来は短くなるが、これも悲劇である。日常生活においては、好奇心が衰え、習慣による支えはあっても老いは心の明澄をもたらさない。老人が退屈しているのは、かれの置かれた状況がかれを阻害しているからであり、突破口が見つかれば、かれを閉じ込めていた円環が破れて好奇心を見出すだろう、とする。そして老年を楽しくすごした例（ユゴー）と、みじめな例（トルストイ）とを挙げている。

結論として、老化は生物学的に不可避だが、老人は一人の人間として多くの可能性をもっているので、社会的仕事をもつなど、生きがいと強い情熱をもち続けることができるような状況に置かれる必要がある。労働力として不要になった人間が見捨てられるような社会全体のシステムを根本からつくりかえねばならない、と力強く結んでいる。

ボーヴォワールの目線は、定年退職したあまり教育を受けていない労働者にある。老人は社会的に老人にされているという主張は、女性は社会的に女性にされているという『第二の性』の主張と同じである。今の社会システムは老いの根本的な内面の解決になっていないとするが、これは、現代社会はまったく老人のQOLを問題にしておらず、逆にQOLが高くない老人は生きるに値しないとでも言わんばかりのシステムになっている、と批判していることになる。しかしその主張に問題がないわけではない。利潤追求を第一とする資本主義社会が悪い、搾取階級がつくった社会がだめ、というステレオタイプの怒りが先立っている。東欧諸国、旧ソ連の資料も出しているが、社会主義でも老人の苦悩は同じだろう。社会を変えろという理想論のみで、そのためには財源の分配原理どうするか、社会制度の改革プランなど、具体的な方法が示されていない。二一世紀

の現在では、西欧の老人問題も次第に改善されてはいるであろうが、個人主義の社会であるかぎり根本的には解決せず、そのつけが老人にまわって来ている感がある。家族や地域社会が懸命に老人のケアをしている日本独特のシステムを、彼女に見て欲しいと思う。

おわりに

以上から、現代人はどうということが学べるであろうか。

キケロの言うように、本当にやりたいことができるのは老年かも知れない。若いときからそれに値するだけの投資をし、苦勞して生きてきたのだから、当然の報酬として老年を充実して、楽しく有意義に暮らしたものである。フランス語で老年のことを「人生の冬」というが、むしろ「人生の秋」と理解したい。それは、男女を問わずこれまでの努力が、カナダの秋のメープル街道のように、いつせいに黄金色に輝いて、QOLが最高になる時期ではないのか。

デカルトの教えるように、日頃から自分でQOLを高める努力をすることも重要であろう。ただ自分ひとりの人生を問題とするのではなく、たとえば世のためになる仕事、何らかの社会貢献（ボランティア活動）が生きがいになる。他人との交わり、地域社会との接触など、何らかの社会的関係において生きることがQOLの高揚にとって大切と思われる。

だが健康な老人の場合はそれでよいが、病気になるし動けなくなつたらどうするか。生命倫理学が問題にしているのはこの状況でのQOLである。老人の介護は家族では限界がある。ボーヴォワールが指摘するように、Q

〇しを高める社会的基盤の整備は喫緊の課題であり、国としてこれからの超高齢社会へ先行投資をしておく必要であろう。たとえば、経済的負担を気にせずに一般庶民が利用できる老人ケアのシステムやホスピスの充実を、全国規模で推し進めることが重要である。一昔前に比すれば、現在多くの自治体で介護センターやホスピスが格段に整備されてきてはいるが、ベッド数ではまだまだ十分でないようである。そしてその際、西洋風の個人主義的ケアでなく、日本風のきめ細かいサポートを忘れてはならないだろう(6)。

註

(1) 本稿は、名古屋大学ラジオ放送公開講座(二〇〇四年七月四日、東海ラジオ)において「老いと生命倫理」と題して放送したものを、タイトルの修正を含めて全面改稿したものである。その性質上、原典からの引用箇所の明記などの学問的手続きは省略してある。

(2) 国連の統計によれば、一国の総人口のうち六五才以上の人の占める割合が七%を越えたとその国は「高齢化社会」、一四%を越えたと「高齢社会」、二二%を越えたと「超高齢社会」と呼ばれる。日本は一九九五年に一四%を越え、二〇〇四年の現在では二〇%近くに迫っている。

(3) この他にも、老年に関して味わい深い名句がちりばめられているのが興味深い。「何らかの終わりが必ずやなければならぬ。ちょうど木の実や大地の稔が、時を経た成熟のうちに、萎れたりぼとりと落ちたりするように」。「老年を守るに最もふさわしい武器は、諸々の徳を身につけ実践することだ」。「次の世代に役立つようにと木を植える」。「若

者の熱意に取り囲まれた老年ほど喜ばしいものがあるうか。「人生は知らぬ間に少しずつ老いて行く。突如こわれるのではなく、長い時間をかけて消え去ってゆくのである。「つかの間の人生も、よく生き、気高く生きるためには十分に長い」。「老年の実りとは、以前に味わったよきことの豊穣なる思い出にほかならない」。「老年にはいわば最後の仕事がある。それが消えてなくなるときには、人生に満ち足りて死の時が熟するのである」。

(4) 以下の記述は、拙論「デカルトと医学」(『名古屋大学文学部研究論集』哲学五〇、二〇〇四)一八〜二三頁、二七〜二九頁に基づいている。

(5) たとえば、「老境もまた楽し」としたソロンに対して、「老人なんかになりたくない」とするミムネルモス、老境に肯定的なプラトンに対して、それに否定的なアリストテレスが対比される。ポーヴォワール自身はキケロには批判的であり、「年を取るということは、親しい人びとが死ぬのを見ること、喪と悲しみに運命づけられることである」(ユヴェナリス)、「われ愛するゆえにわれあり」(サン・テヴェルモン)に同感的である。

(6) 私があるホスピスを見学したかぎりでは、ガリバー旅行記で老人の国に来た感じがした。老人ばかりで若者がいないのである。談話室には、うなだれた老人がボツン、ボツンといるだけで、テレビだけがしゃべっている。相互の会話がまったくない奇妙な空間であり、これで老人は本当に幸せなのだろうかと思った記憶がある。